半機械指揮官が人形たちの話

紅鴉

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

体の半分が機械化してる指揮官が
ネタ全開、たまにシリアスやって過ごす
なんかどうしてこうなったとしか
いいようのない小説。
並行して指揮官になれなかったから
整備士になったほうと一緒に
話が進むから必然的に亀更新になりますが、
あんまり気にしないでね！

目次

1, Prologue ―――――――――――――――― 1

1，Ｐｒｏｌｏｇｕｅ

「…ここが新しく入ることになる場所か…。
　なんていうか、どんよりした空気だな。」
「あ…、貴方が新しく入ることになる指揮官、
　ですよね？ま、間違ってたらごめんなさい！」
　「いや、合ってる。えーと…」
「あ、私、カリーナっていいます。」
「よろしく、カリーナ。」
「は、はい！よろしくお願いします！」
　…なんだろう。気を使わせてしまっているの
　だろうか、やけに緊張している様子だ。
　…いや、違うな。これは…。
「とりあえず中を案内してくれないか？」
「は、はい！分かりました！」

ふむ、粗方回ったが設備は整っている。
ただ…使用されていない低練度の人形達が
多くいる。まさか前任の指揮官は…、
捨て駒をおこなっていたのか…？
だとすればこの反応も納得がいく。
ハァ…苦労しそうだな。
「カリーナ、ここの人形は拡大はしている
　のか？やけに低練度のやつが多いみたい
　なんだが…。」
「あの、それは…前任の捨て駒、ですね。」
「やはりか…、編成拡大は？」
「一度もしていません…前任はそれを
　知らないで突貫させていましたし…。」
「なら、この際出来るところまで拡大して
　しまおうか。コアの残量は？」

「２０００強はありますけど…。…え？」
「ん？…言っておくが捨て駒はしないぞ。
　したとして利益はないだろう？」
…今カリーナの口からやっとマトモな人が
来てくれたって聞こえたんだが…（頭押さえ）
いや、うん。あまり気にしないように…
バァンッ
「カリーナ！そやつが新しい指揮官か!?」
「あー…はい、そうです。」
「阿賀野　紫月だ。よろｓ」パァンパァン!!
「あ”ぁっ!?ちょ、なにしてるんですか！
　Ｍ１８９５ｓ「いい、分かってた。」え…？」
「問題ない、義手に当たっただけだ。」
「ハァァァ～…びっくりしました。」
まぁ、この状況ならば誰かしらやってくる
のでは無いかとは思っていた。
前任のせいで指揮官は皆屑だという偏見が
付いてしまっているのは容易に想像できる。
本ッ当に苦労しそうだな…。
「あれ？ていうかそんな精巧な義手を一体
　どこで…？１６ＬＡＢでもそんなのは作れない
と思うんですけど…。」
「あぁ、これか？俺が鉄血の部品を使って
　１から作ったものだ。」
「え”っ…、いやいやいやいや！なんてもので
　作ってるんですか…!?」
「何かの拍子に乗っ取られたりでもしたら
　どうするつもりなのじゃ?!」
「これで３年ぐらい生きてるから問題ない。」
「「えぇ…（困惑）。」」
まぁ、それに…いや、これはやめておこう。

さて、とりあえずここに配属されている
人形達がどれくらいいてどれぐらいの強さ
なのかを確認しなくてはな…
…って結構高いな。とても編成拡大しないで
特攻させてたとは思えないくらいだ。
あー、いや、模擬訓練したら上がるか…？
つっても微々たる量にしかならないはず…。
「あの…非常に言いづらいのですが…。」
「まぁた前任か。で、何してたんだ？」

「はぁ!?人形同士での実弾での模擬戦!?
前任の頭はどうにかしてんじゃねぇのか?!
そうか、そりゃああもなるわ！」
「あの状態を全て治すには相当量の資材が
必要になりますね…。」
「いや…伝手はあるからいいんだけどさ…。
っと、へいもしもしー？相棒ー、もし
良かったら何だけどそっちの資材半分
ぐらいくれたりしないー？」
[あー？まぁいつも最大量近く溜め込んでて
大量にあるから問題ないがまたなんで？]
「いやさ、新しく指揮官として指令部に来た
んだけどさ？ほとんどの人形が前任のクソ
ヤロウのせいでボロボロでさー。」
[なるほど、ブラックだったってか。分かった。
ちと妥協して欲しいんだがこっちも忙しい
時期でな。三分の一で勘弁してくれ。]
「あー、低体温症か。頑張れよー。」
[お前さぁ…あっちに居たときの感覚で
ほかのやつと話したりするなよー？んじゃ]

「…よし。１０万ぐらいの資材が手に入るｚ
「いやいやいやいや!?え、前線の方と
知り合いなんですか!?」
ふーむ…まぁ、あいつのことだし言っても
なんら問題は…ない、か?……うん、無いな。
「血染めの突撃隊を知っているか?」
「え?…たしか、人間５人の部隊で多くの
鉄血を葬ったっていう部隊ですか?」
「なんじゃ?そんな部隊があったのか?」
「そうだ。あいつはその隊員で、俺はそれの
リーダーをやっていたんだよ。」
「え?!…マジ、ですか…?」
「なんじゃと!?」
血染めの突撃隊。人形が開発される前、
Ｅ．Ｌ．Ｉ．Ｄ．相手に無双をかまし、人形開発後の
鉄血との戦争でも鉄血のハイエンドモデル
であるエージェントを瀕死に追い込んだ
事がある部隊だ。あいつ…いや、ここでは
[相棒]と呼んでおこう。相棒はそこで
メインタンクをやっていた。
愛銃はＶｅｃｔｏｒ。今はＰ９０を使っているがな。
俺?俺の愛銃はＳＣＡＲ―Ｌだな。
…昔も、それから、今も。
「まぁ、その伝手でなぁ…ま、今回は忙しい
らしいんであまり貰えなさそうだが…」
「いや、１０万は十分多いと思います。」
「ん?そうか…?そんなに多くはないし、
血染めのときは倍以上使ってたからなぁ…」
四六時中戦闘続きだったから資源の消費が
大変なことになってたんだよなぁ…。
むしろ相棒はどこから仕入れてんだか…。

というか今でも副業で裏の仕事をしている
のかも知れないな…。
「E．L．I．D．も相手してたんですもんね…それ
ぐらいが普通だったなら感覚がおかしく
なってるのも納得がいきますね！」
「そ、そうなのか…いや、単純に前任者が
ケチだったのもあるんじゃないのかソレ。
もしくは書類の偽装もありえるけど。」
「書類に関しては私が確認していたり、
本人が書類だけは真面目に書いたりして
いましたので偽装はないです。」
書類だけは真面目だったのか…。（困惑）
まぁ、取り敢えず…。資源が来るまで暇だし、
Ｍ１８９５、他の子たちを集めてもらえる？
何人かはかなり酷い扱いを受けたみたい
だから、話を聞いておきたくてな。
「分かったぞい、任せておれ！」
「さーて、準備しますかねっと…。」